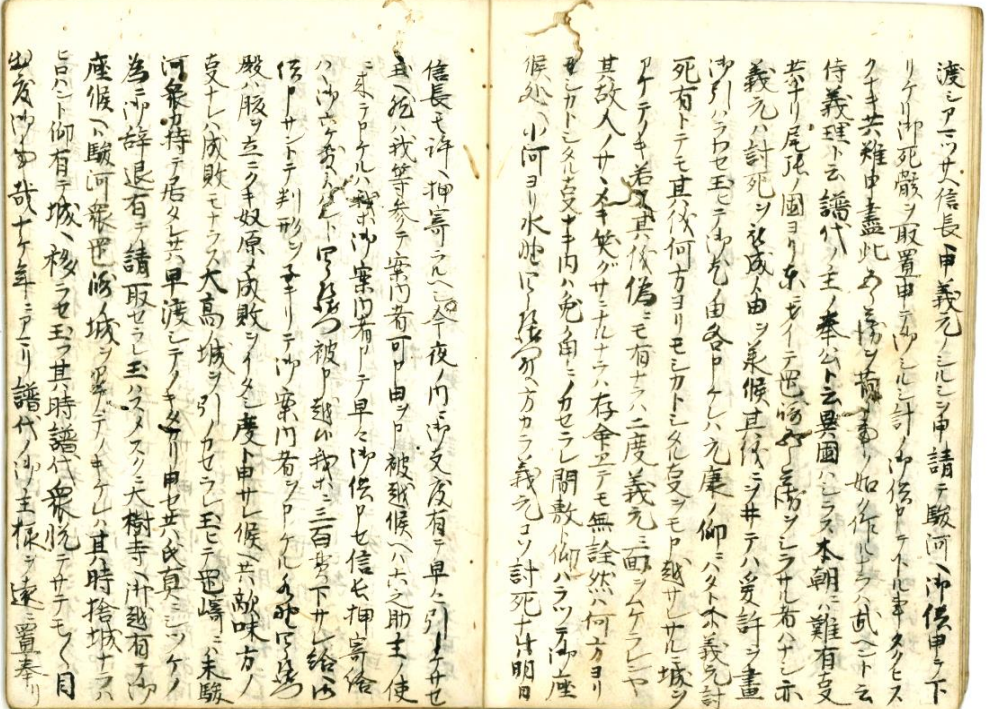
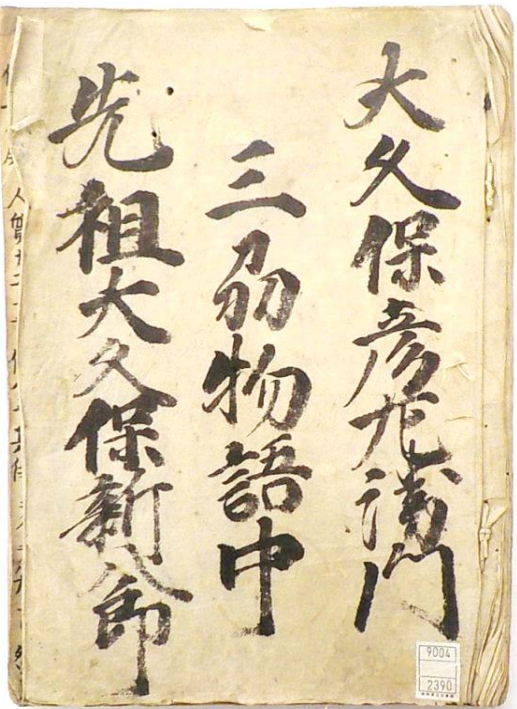


成立：元和8年(1622年)4月カ

「三河物語」は家康の家臣大久保忠教ただたかが著した徳川家康の伝記です。上・中・下の三巻で構成されています。展示部分には、桶狭間の戦いにおいて討ち死にした今川義元の生死を慎重に見極める家康の姿が書かれています。若き日の家康を書いたこの文章からは、この時既に生涯にわたって数々の窮地を脱していった慎重な姿勢おおだかが見受けられます。家康はこの後、大高城を撤退し、本拠地岡崎城に入城すると三河国統一に向けて本格的に始動していきます。

角田光枝家文書 P9004 No.2390



〔4〕 三河物語 第二

(P9004 角田光枝家文書 No.2390)

〔釈文〕

〔表紙〕

大久保彦左衛門
三河物語中
先祖大久保新八郎

〔前略〕

渡シ、アマツサへ信長へ申、義元ノシルシヲ申請テ、駿河へ御供申テ下リケリ、御死骸ヲ取置申テ、御シルシ計ノ御供申テ下ル事、タクヒスクナキ共、難ニ申、盡(尽)ニ此五郎兵衛ヲ昔ノ事ノ如ク作ルナラハ、武へント云侍義理ト云、譜代ノ主ノ奉公ト云、異國ハシラス、本朝ニハ難レ有、共ナリ、尾張ノ國ヨリ東ニオイテ、岡崎五郎兵衛ヲシラサル者ハナシ、亦義元ハ討死ヲ被(被)成候由ヲ承候、其儀ニヲキテハ、愛許ヲ畫(画)御引ハラワセ玉ヒテ、御尤ノ由各申ケレハ、元康ノ仰ニハ、タトヘハ義元討死有トテモ、其儀何方ヨリモシカトシタル、更ヲモ申越サレサルニ、城ヲアケテノキ、若又其儀、偽ニモ有ナラハ、二度義元ニ面ヲムケラレンヤ、其故人ノササメキ笑ツサニナルナラハ、存命ニテモ無レ詮、然ハ何方ヨリモシカトシタル、更ナキ内ハ、兎角ニノカセラレ間敷ト仰ハラツテ御座候処へ、小河ヨリ水野四郎左衛門殿方カラ義元コソ討死ナレハ、明日信長其許へ押寄ラルヘシ、今夜ノ内ニ御支度有テ、早々引ノケサセ玉へ、然ハ我等參テ、案内者可レ申由ヲ、申被レ越候へハ、六之助、主ノ使ニ來テ申ケルハ、我等御案内者申テ、早々御供申セ、信長押寄給ハ、御六ヶ敷候ハント、四郎左衛門被ニ申越候、我等ニ三百貫下サレ給へ、御供申サントテ判形ヲネキリテ、御案内者ヲ申ケル、水野四郎左衛門殿ハ腹ヲ立、ニクキ奴原メ成敗イタシ、度ト申サレ候へ共、敵味方ノ更ナレハ成敗モナラス、大高ノ城ヲ引ノカセラレ玉ヒテ、岡崎ニハ未駿河衆力持テ居タレ共、早渡シテノキタカリ申セ共、氏真ニシツケノ為ニ御辞退有テ請取セラレ玉ハス、スクニ大樹寺へ御越有テ御座候へハ、駿河衆岡崎ノ城ヲアケテノキケレハ、其時捨城ナラハ、ヒロハント仰有テ城へ移ラセ玉フ其時、譜代衆悦テサテモ、目出度御事哉、十ヶ年ニアマリ譜代ノ御主様ヲ遠ニ置奉リ

〔後略〕